

問い続ける農村研究の「課題」

農業・農村領域 研究員 佐藤 真弓

未来の農村をどのように想像しますか。今より多様性が尊重され、空間を共にする人々が居心地よく暮らしていける、そんな共生社会を実現するために私たち研究者は何ができるでしょうか。

近年、都市からの移住者誘致や外国人労働者の参入、女性の参画等が政策課題となる中で、農村においては多様性を前提とした共生社会の形成が大きなテーマとなっています。これは農村研究にとって二つの意味が込められていると思います。一つは農村において共生社会を実現するための課題や施策を探ることであり、もう一つは農村研究を通して、日本社会における共生社会のあり方を探ることです。両者は共に農村を舞台とした研究である一方で、議論の組み立て方や政策課題との距離感等は異なっています。以下では農村研究におけるこれら二つの側面に注目し、当研究所における農村研究の今後を展望します。

まず前者について、私自身が関わっている研究を例に挙げると、移住者と居住者との関係構築をサポートするシステムに関する研究や、若い女性農業者の経営参画を規定する要因分析等があります。これらの研究は、農村に移住しても地域コミュニティに溶け込めず定着しない移住者や、農業経営における意思決定の場から排除されてきた女性がいるという現実的な「課題」から議論が発し、その「解決方法」を「成功」事例あるいは「失敗」事例を題材に探り出そうとするものです。ここでの研究課題は政策課題と重なり合う、近い間柄にあります。

他方で、後者の研究課題は政策課題とは一定の距離があります。政策そのものの効果や影響よりも、政策が作られる社会そのものに関心が向けられます。その意味で課題探索型の研究とも言えるでしょう。こうした視点での研究は実際にどのような方法で行うことができるのでしょうか。ここでは再び農村移住を例に挙げ、これまでのフィールドワークでの見聞や共同研究での議論をもとに一案を述べたいと思います。

「理想のIターンを演じていました」。これは過疎化が進んだ集落に移住した女性が口にした言葉です。女性は役場で移住者として移住支援業務に携わったのち、当地に居を構えたところでした。近所の人には孫のようにかわいがってもらい、最近は集落の役も任されるようになりまし

た。経済的に余裕はありませんが、農産物の生産や販売から得られる収入のほかに集落の人から頼まれるこまごまとした仕事を請け負うことも多いです。そう話すとおり女性は当地にそれなりに馴染み、充実した暮らしがうかがえます。しかし女性はその後静かに集落を離れていきました。

この事例をどのように解釈できるでしょうか。冒頭で述べた二点に照らし合わせると、前者では定着しなかったという結果（課題）やその理由（解決方法）に目が向けられるでしょう。具体的には経済的な理由やライフステージの変化、人間関係…様々な要因を想定し、その影響関係等が分析されます。

後者ではどうでしょうか。ここでは女性の意識や居住者との付き合いから浮かび上がってくる、共生社会に通じる「工夫」や「作法」に注目します。時に自身をがんじがらめにしてしまう規範意識はどこから生じ、移住者の行動にどのような影響をもたらせているのでしょうか。居住者との価値観をめぐり、時にはその溝の深さに理解することを諦め、やり過ごしている様子をどのように描写することができるのでしょうか。

研究課題を問い続けるには忍耐力が必要です。しかし我々の農村研究により深みと奥行きをもたらしてくれるのではないのでしょうか。



フィールドワークで出会った尊敬する友人Mさん夫妻がつくった色とりどりの農産物。箱をあければ宝の山。